

令和三年四月十日発行
皇學館論叢第五十四卷第一号 抜刷

資料紹介

川喜田政明と井上文雄

—— 石水博物館蔵 政明宛文雄書翰を読む ——

中
澤
伸
弘

川喜田政明と井上文雄

——石水博物館蔵 政明宛文雄書翰を読む——

中澤伸弘

□ 要 旨

徳川時代後期の地方歌壇の結成や所謂国学の全国的な展開には、地方門人の存在とその指導のための書翰の往来、詰まりは今日言ふところの通信教育があつたことを考へねばならない。このことは夙に指摘してきたところである。

幕末期の江戸歌壇の殿将とも称される井上文雄は、田安家の御典醫といふ身分を持ち、江戸の町にありながらも地方に門人を擁した。殊に伊勢の佐々木弘綱が安政四年に入門したことは、文雄にとつて伊勢との繋がりを持つよい機会となつたと言へるが、この入門の梯立てになつたのが川喜田政明であつたやうである。文雄の江戸での人脈と、弘綱の伊勢での人脈とが相互に繋がることにより、なほ広い人間関係が構築されていつたのであり、そこに書物の刊行

やその援助が重なつてゆくのであつた。江戸歌人としての井上文雄の活動の蔭にはかやうに地方門人からの支へがあつたことを考へなければならぬ。

しかしながらそれを証する資料はあまり残存してゐないのが実情である。幸ひなことに津の石水博物館に文雄の門人であつた川喜田政明宛の文雄書翰が三十三通所蔵されてゐる。本稿は石水博物館のご理解を得て、これらの書翰から政明や弘綱が文雄とどのやうな関係にあつたのかを考へてみたものである。書翰は一級資料であることは確かであるが、また公開を前提としてゐないものであつて当事者同士ではないとよくわからない情報もある。それでも少しでも不明な点が明らかになればと思つてゐる。

□ キイワアド

川喜田政明 井上文雄 伊勢の家づと さきはひ草

鶴調集

一、はじめに

井上文雄は寛政十二年八月十五日に江戸に生まれた（『千曳の巖』序文）。井上家は幕府の奥医師の家柄で文雄ものに御三卿の一つである田安家の奥医師となつた。歌は所謂江戸派の岸本由豆流、一柳千古に師事し、歌人として優れた評判を得た。歌論に『伊勢の家づと』初編、三編があり、歌集に『調鶴集』（井上文雄翁家集）がある。また門人知友の歌を集めた類題の歌集に『摘英集』、その二編にあたる『さきはひ草』がある。文雄は維新後も存へて、明治四年に七十二歳で逝いた。

川喜田政明（久大夫 石水と号す）は室町時代からの名家である川喜田家の十四代にあたり、文政五年、伊勢の津に生まれた。川喜田家は江戸に店を構へる木綿問屋であり豪商として聞こえた。父政安は遠里と称し、祖父政式ともに本居宣長の門人であり、そのやうな家庭環境から商業の傍らに茶道や歌などの文芸に親しんだ。蔵書の充実に努め京の蛭子屋（城戸千楯）や江戸の岡田屋からの書籍購入にあつたの書翰が残つてゐる。

政明の文雄入門の年代は定かではないが、嘉永五年の書翰があるものでそれ以前のことと思はれる。そしてその入門は政明の書物の購入先の書肆である江戸の岡田屋専七が仲介したのではと思ふが確証は無い。そしてこれも確証はないものの弘綱の文雄入門には政明の勧めがあつたのではなからうかと思つてゐる。

弘綱は文政十一年、同じく伊勢の石薬師に生まれた。政明の六歳下となる。幼少期から父の教へを受け、二十歳で伊勢の足代弘訓に入門し、その才覚を發揮した。安政三年弘訓が逝いた後に江戸の井上文雄につき歌学を修めた。安政四年八月十日に入門したことがその『佐々木弘綱年譜稿』に見えてゐるが、この唐突さは否めない。弘訓が主に文法に長じてゐたことに対し、文雄は所謂江戸派の歌人として著名であつた。弘訓とはまた別の歌風、学風であつた文雄に、三十歳の若さで、それなりの学識を備へてゐた弘綱がわざわざ江戸に出てまで刺を通じる契機は、何であつたのかが私の疑問である。弘綱の江戸滞在は同郷の竹川政柱、政恕の「江戸のやどり」に同居してのことであり、その後十一月十八日には信楽の藤尾景秀が上京し、ともに文雄の門下活動が始まつたのである。この同郷の有志を経済的に支へた蔭に川喜田家の江戸店、政明の学事奨励の思ひがあつたのではないかと密かに考へてゐる。政明は文雄歿後も存らへて明治十二年に逝いた。私は嘗て同じく伊勢の門人の磯部

長恒宛の文雄書翰を通して、やはりこれと同じ時期の交流を考へたことがある。(徳川時代後期歌人の交流―井上文雄と磯部長恒との一考察―「渋谷近世十九号」國學院大學近世文学会) この一文もそれを参考にされると同時代の同じ土地の空気が読み取れるものと思ふ。なほ文雄については鈴木亮氏に継続的な研究がある。

二、初期のもの 嘉永五年

三重県津市の石水博物館所蔵の井上文雄書翰は正しくは三十四通であるが、一通は渡邊蒙庵宛でありこれはここでは除いた。また三十三通のうち一通は嗣子の政豊宛のものである。以下その書翰を通じて考察をしていきたい。

翻刻凡例

イ、書翰の翻刻にあたり、はじめの時候の挨拶にあたる箇所、並びに文末の儀礼的挨拶文は主に省略した。

ロ、判読困難な文字は□にしてある。

ハ、書翰頭に付記した数字は「石水博物館所蔵書簡目録」〔研究報告書伊勢商人の文化的ネットワークの研究〕令和二年三月刊〕の通し番号である。

二、書翰は全てが月日のみの記載であるが、内容から判断して年紀を補つたが、必ずしも正確ではないものもある。これらの書翰のうち最も時代が上がるものは嘉永五年と思はれる次のものである。

●三三一 (嘉永五年) 三月四日

先月十九日之御消息廿七日手に入恭拝読仕候(略) 旧年は尊大人御遠行引続当春御舍弟御小兒様御遠行の由何かと御愁傷奉察候 併御忘父様御跡御用達被仰付候段奉賀候 右等二付御多忙の段唯々奉□察候 小生も何かと日々繁多御無音に打過候御海恕被下候
扱真(カ) 洵忌御詠御香華料五十四匹態々御呈立被下候所 廿九日快晴二而至而盛会に御座候 其外御社中様方の□□□□相備申候 御鶴声可被下候
一、犬物語とかいまだ一覽不仕候 御序二拝借仕度奉存候 当地も此節は花盛二而角田川も昨日遊行致満開御ざ候ひし勢遊の義被仰下有難何卒兩三年の内随御地思立可申専相衆居候 其節は宜敷奉存候 竹川彦三郎殿御逢も御座候はば宜敷御傳可被下候 日々多忙(略) 時下御自愛專一奉存候 花盛開 愚詠 山桜かかる盛にあふ事は少なかり少なり 御一笑可被下候

政明の父政安（遠里）は嘉永四年十一月二十七日に五十六歳で逝いた。本翰にはその父の死去を旧年のこととして書いてあるので、嘉永五年のものとした。この春には甥をも亡くし、不幸の中でも父の跡目を継いだことを賀してゐる。この年の二月十九日付で差し出した政明の書翰を文雄は二十七日に受取り、三月四日に返事を認めたのである。折りしも江戸は桜の花盛りだったやうで昨日は隅田川の花見に出かけ「満開御ざ候」と告げ、花盛開の題で歌を文末に書き付けてゐる。現存する三十三通の中で年代が特定できるもので、最古のものはこれであり、嘉永五年である。そして文面からもこれが初めての文通ではないことが知られるのである。書翰は現存しないものの政明と文雄との交流は嘉永四年以前にあつたこととなる。佐々木弘綱の入門はあと五年後のことである。さて、二月二十九日に江戸では真淵忌が行はれ、歌とともに「香華料五十匹」が届き、盛会であつたことの報告とその御礼を社中の皆様へお伝へくささいとある。賀茂真淵の忌日は普通九月二十九日で、品川の東海寺に集ひ行はれることが常であるが、この書翰は「真淵忌」と判読できる。石水博物館の竜泉寺由佳学芸委員の御教示によりと嘉永六年に政明が江戸へ行つた記録の『羈旅漫録』には三月三日に文雄を訪ひ、同十一日には「真淵忌」に参列してゐる由であるから、文雄周辺では春先に行なはれてゐたやうである。

川喜田政明と井上文雄（中澤）

『犬物語』については（二二二便）にも見え、此の時にはまだ見てゐないと答へてゐる。これは千種有功の門に入った黒澤翁満が、有功を論難したもので『枕草子』にある犬の名「翁丸」のもぢりの書名で、築瀬一雄が刈谷の村上文庫本を元に碧沖洞叢書八十九輯に翻刻してゐるものであらうか、この文面からなので政明とのつながりがあつたのであらうか、この文面から政明の手許にその書があつて、「拝借仕度奉存候」となつてゐる。また竹川彦三郎への挨拶も依頼してゐる。これは政眸（竹齋）のことであり、政明の後妻がこの妹ゆか（後まさ）である。

●二二二（嘉永五年）五月二十日

御詠草一卷廿三日近々差上可申候 将御謝義等御座候而金
一円御恵投千万奉謝候 拜眉御厚礼可申上候 犬物語の義
承諾仕候 何れ後刻久松へ参申候間尊君御早々御座候ハば
御立寄奉待候 廿三日ニは何卒御来駕可申候 両三輩御留
別の筈相催可申候 頓首

前便に続き、『犬物語』についての言及があるので同じ年と考へてみた。ただ此の文面の「拜眉云々」から察するとこの時に政明は江戸に滞在中のやうである。江戸店を構へてゐたのだから、二二二便においても触れたが江戸への往来もあつたことと考へられるし、江戸滞在中には文雄のところへ行き来もしてゐよう。二二三日に両三輩の送別の宴会をするので是非おいで戴

きたいと述べ、詠草もその日にお会ひしてお返ししようとする。また『犬物語』については、後ほど久松（祐之か）へ行くのでその前にお立ち寄りいただきたいと述べてゐる。江戸出府にあたり『犬物語』を文雄に貸すか、または貸してゐたものを返すかであらう。有功と翁満との歌の論争は当時の歌人の氣になつてゐたことやうである。

文雄が書物を政明から借りてゐたことを示す一通がある。

●二二五（年不明） 日闕

先年拝借の回鑾詩歌録仕舞込大延引 此節見出候間返上仕

候 御落手可申候 頓首

文雄は山本榕堂編になる『回鑾詩歌録』を借りてゐたことが分かる。本書は安政二年十一月、安政内裏への御遷幸を詠んだ堂上地下の詩歌集である。本翰は年紀を欠くが、安政三年の上梓以降のものである。政明からの書物の借用の書翰はこの一通しかないが、蔵書家の聞こえのあつた政明から他にも借りた書物があつたのではなからうか。

三、風流寂寥 嘉永から安政へ

●二二四（嘉永七年）七月十八日

芳翰忝拝読仕候（略） 小生腫物も順快乍憚御放念可被下

候 御地古来未曾有の地震の由尊宅御別状も無之 併何か
と御配慮奉然察候 当地も異国船後風流不行 寂寥二御座
候 先ハ御礼旁地震の御見舞如斯御座候

幕末期は各地で地震が多発した時期であつた。嘉永七年六月十五日、美濃飛騨にかけての大きな地震があり、伊勢でも「古来未曾有の地震」に感じられたが、政明方は「別状も無之」様子であつたことがわかる。これは地震の見舞ひ状である。また文雄は独自の「風流観」をもつてゐたやうであるが、それが異国船が来たあと「風流不行 寂寥」となつてしまつたことを嘆いてゐる。嘉永の黒船来航以来、数年で世の中が変化したやうである。同様なことは次の書翰にも言及してゐる。

●二三三（嘉永七年）四月一日

御詠草拝見今便は別而御出来深く奉感候 扱当所も定而御

聞も被為在候半けしからぬ大変二而人氣も穏やかならず風

流地に落申候 近詠二葉入御覧申候 御笑評可被下候

ここではけしからぬ大変化であり、「人氣も穏やかならず風流地に落申候」と江戸の無風流をかこつのであつた。『調鶴集』に「安政戊午秋日有感作歌短歌」と題する長歌と反歌があるが、「安政戊午」は疫病の流行した安政五年である。文雄は異国船から疫病が蔓延したと捉へ、その蔓延の原因に敷島の歌の衰弱、言霊の衰へがあると指摘してゐる。文雄の言ふ風流は雄雄しい

歌への復興でもあるやうだ。文雄は自撰の『摘英集』のはじめに、自らの歌論を述べてゐる。その概要はのちに刊行された『道のさきはひ』にもあるが、要は勅撰集にある歌はそれなりの整つた歌ではあるが、真の心は私家集の歌にあり、諷諷倒語と言ふものであるといふ。『いせの家づと』に述べるところもこれに同じい。このことはまた別に述べよう。

●二一九（安政二年）十月二十四日

本月二日の地震は去元禄以後の大変ニ御座候 拙宅も御蔵

潰 肝を冷し申候 委曲は定而御店より相聞え可申候間文

略仕候 愚詠二葉入貴覧申候 御一笑可被下候

安政二年十月二日夜に起きた江戸の安政大地震についての書翰である。江戸茅場町の文雄宅は蔵が潰れ「肝を冷し」た次第であつた。詳細は川喜田家の江戸店から聯絡が行つてゐるであらうと書いてゐる。此の地震を「元禄以後の大変」（「武江年表」などにもこのやうに表記してゐて、当時の流行り語句であつたやうである。）と表記する割には内容は略されて簡素で、「大変」の内容が伝はらないものとなつてゐる。

四、『いせの家づと』二編の刊行 文久二年

●二一九（文久二年）六月十日

（別封弘綱へおとどけ奉希候）

家づと二篇上木出来仕候間一部呈普仕候 御入用ニ御座候

バ猶又可被仰付候

『いせの家づと』二編が出来上がったので、早速一部送付をした。更に希望があればまた送ると言ふ。また別封を弘綱へ送つてほしいとも依頼してゐる。文雄は弘綱への書翰を川喜田経由で届けて貰ふことをしてゐる。

実は二一九便と本便との間（安政二年から文久二年まで七年間）に、佐々木弘綱と藤尾景秀との入門があつた。弘綱は伊勢石薬師の人、二十歳で伊勢の足代弘訓に入門し、その才覚を發揮したが、安政三年弘訓が逝いた後に江戸の井上文雄につき歌学を修めることになる。文雄の名声をもしかすると川喜田政明との繋がりを知ることになつたのではないか。その委細は不明のままである。この入門について『佐々木弘綱年譜稿』によれば、弘綱は安政四年七月二十六日に石薬師を發ち江戸へ向かつた。途中生憎の大井川の川止めによつて、八月朔日から六日まで伊達方の石川依平方に滞在し、八月十日に江戸へ着いた。そ

して「竹川氏を旅宿として井上文雄先生へ入門し、諸方の会に出席し、且代稽古などにいづ。また黒川春村先生、山田千寿などのもとをたびたびたづね、拙著竹取物語俚言解を上木す。」と見える。これによるとこの江戸行きは文雄に入門することが目的であつたことがわかる。またこの『年譜稿』にある通り、入門後間もなくの九月九日に、文雄は弘綱の『竹取物語俚言解』に序文を書いてゐるのである。同書には竹川政柱、政恕の序文（安政四とせ長月）があり、「こたび吾江戸のやどりにあひ住して 井上大人の門に入て日々に行かよはれけり ひと日故足代翁に物学せられしちなみに千寿ぬしのことどにいきて としころ何くれと物せられし書ども見せられし中に・・。」とあつて、弘綱は江戸で同郷の竹川政柱、政恕の「江戸のやどり」に同居して、井上文雄の所に通つたのであり、これは『年譜稿』の傍証となる。また弘綱が文雄の許を辞するにあたり、書き与へた『伊勢の家づと』初編の竹川政恕の跋文にも「わが江戸の旅やどりに相すみして 井上翁がりがかよひてものとふこと一日もおこたらず」と同様の勤勉ぶりが書かれてゐる。その後やや遅れて十一月十八日には藤尾景秀が上京し、ともに文雄のころでの活動が始まつたのである。

弘綱が主に文法に長じてゐたことに對し、文雄は所謂江戸派の流れを汲むとは言へ独自の歌論を持つ歌人として当時は聞こ

えてゐた。弘綱とはまた別の歌風、学風であつた文雄に、三十歳の若さであつても、それなりの学識を備へてゐた弘綱がわざわざ江戸に出てまで刺を通じたのは、政明の薦めがあつたのではなからうか。弘綱は翌年二月に文雄の許を辞した。『年譜稿』に「廿六日藤尾君にいざなはれて江戸出發、三月八日帰国」とある。これは郷里からの催促があつたやうでもあるが、二月の大火によつて文雄邸が焼失したためであつた。（拙稿「徳川時代後期歌人の交流―井上文雄と磯部長恒との一考察―」参照。先述した通り、此の時に文雄が書き与へたものが『いせの家づと』初編であり、そのことは初編の文雄の序文や、藤尾景秀の「國にかへりなんとするに翁例のいとまおはせぬ中より」とみにもものしてあたへられしは このひとまきの家つとなりけり」との跋文からもわかる。初編は「佐々木弘綱蔵梓」とあつて、弘綱の私家版として竹川政恕の協力援助のもと（初編竹川跋文、二編藤尾序文）刊行されたやうである。勿論そこには竹川家と繋がる川喜田家の援助もあつたことと思はれるが、『いせの家づと初編』と明記された書翰がないため、その扱ひに慎重にならざるを得ない。尤もはじめから三編まで書くつもりもなかつたであらうから、単に「いせの家づと」とあれば「初編」と考へてもよいのかもしれない。当然この七年間に該当する書翰があるはずだが、年紀の確定が難しいので最後の方に一括して

おいた。

『いせの家づと』二編は文雄が初編に書き漏らしたものを纏め、文久元年の冬に藤尾景秀に与へたものである。初編以来三年は経過してゐた。同年十一月弘綱は津の藤堂侯に召され、そのため津に滞在してゐた十二月の寒夜に景秀からこの書が届き、出版の相談となり、跋文を書いて返送した。そこに翌二年睦月の序文を景秀が書いてゐる。出版は順調にいつたやうで六月には無事に上梓に至つたのである。ただこの序跋文をよく見ると、景秀の序文を横山由清が、弘綱の跋文を大野定子が代筆して書いてゐることがわかる。(文末に参考として掲げた)両人とも江戸の文雄門人であることから、本書の刊行費用は弘綱はじめその周囲の伊勢の門人が負担し、出版事務は江戸で、江戸の書肆(後に芝神明前岡田屋専七とわかる)を通じてなされたことがわかる。

●一〇三六 (文久二年) 閏月(八月) 十一日

先月廿六日の花翰恭拝見仕候(略) 家づと二篇差上候所
御肴料と御座候而金二百五十匹御恵贈奉萬謝候

尊君毎々種々の御拝領物等且點取御勝二付御袴地御頂戴之
由 御□□之御事奉賀候 先日御山荘へ被為在の節 御
直々拙老御噂も被為在候 有難仕合 御序之節程 宜罷仰
上可被下候 凌雲近々帰府之間 所々相待居候

川喜田政明と井上文雄(中澤)

阿州侯御短冊之義承知仕候 頃日拙老罷出候節 霧の香寒
し木曾の山道と申御歌御出詠被遊候 出凡之御歌故霧の香
の中將と称し奉り候 右の御うた近日願上候而望立可申候
御地麻疹虎狼痢流行之由当地も今以相止不申候 併弊屋な
どは□□御座候 弘綱一封御届之由御書面二ハ御座候得と
も參不申 御取□しかと存候

本書翰は七月二十六日付政明の書翰の返信である。『いせの家づと』二編がなり、それを贈つたのが文久二年の六月十日付(二二九)便で、それに対する礼として金二百五十匹を政明から贈られてゐることが見える。また文久二年は八月に閏月があり、この書翰にある閏月の記述からこの書翰を(二二九)便に続くものとして、文久二年八月と比定した。もう一つの理由は「御地麻疹虎狼痢流行之由当地も今以相止不申候」とあることによる。『武江年表』の記事からもわかる通り、文久二年は全国的に麻疹・虎狼痢が流行した年で、伊勢でも江戸でもその流行はなかなか収まらずにあつた。殊に弘綱の周辺では門人の坂倉永勝を六月に、翌月には門人市川貞致をこの感染で亡くし、八月十九日には一人娘の景子を同じく感染により亡くすなど、疫病の流行はかなり弘綱の身近に猛威を奮つてゐたことがわかる。「弘綱一封御届之由」とは(二二九)便にある弘綱への依頼のことであらう。「弘綱へ」お渡しした」と書面にはあるが

返事が来ないと文雄は不満を漏らしてゐるが、弘綱はこのころ疫病の中でも四日市や関、信楽などに出稽古に行き多忙であつたやうで、娘の病変により急遽帰宅してその最期に間に合つたやうな暮らしをしてゐたのである。返事がこないのも当然だが、文雄はそのやうな事情はつゆ知らないであつた。

また政明は文雄の門人である阿波藩主の蜂須賀齊裕の短冊を所望したと見えて、結局これは翌年一月(三〇一九)に見えてゐる。「霧の香寒し木曾の山道」の歌を称賛し、「霧の香の中將」などと称してゐるとの事を告げてゐる。凌雲は藤堂氏、弘綱の『年譜稿』に度々見える画家で近い関係にあつたやうである。凌雲については次にも見える。

●二二四 (年不明) 八月二十二日

別封凌雲へ御届被下候 扱弘綱雲樵へ両度文通致候得共唯今以返知不来候 御序に宜御取斗可被下候

弘綱が江戸から帰つてからのことであらう、文雄は弘綱を通してその周囲の人物と交流の輪を広げてゆく。ここでは、別封を先述の藤堂凌雲へ渡してほしいといふ。また弘綱と雲樵への書翰をも依頼してゐる。二人とも文通したいのだが返事がこないと不平を漏らしてゐる。

●二二六 (年不明) 七月二十五日

毎々度手数ながら別封池田氏へ御届可被下候

ここでは池田氏への書翰を依頼してゐる。但し弘綱との関係を見ると池田姓の人物が特定できない。

●二三五 (年不明) 日闕

本月六日の御花翰恭拝見(略) 御詠草一冊御下し即合点呈候 君公より御懇命度々御頂戴物の由 弘綱も御米之頂戴□□の御目見え仕候由有難仕合人□候 尊君の御骨折と被奉多謝候 今中も御譜代と仰蒙り候由 扱々陰ながら君の御恵便難有奉感候 明年は是非々々と心懸居候 凌雲父子も□事宜取□鶴声可被下候 いせ家づと二編先便奉候 御評可被下候

様々の情報があるものの文字の判読ができない所があり、文意が通じないものである。その上月日もないため、その推定が難しいものである。取り敢へず「いせ家づと二編先便奉候」とあるので文久二年の夏以降のものとしてみた。ここでは拝領物の話題がみえ、弘綱の優遇が政明の骨折りの成果と感謝してゐる。

●一〇三七 (文久二年以降) 一月二十三日

旧臘呈候一書二付御懇篤被仰下候奉萬謝候

弘綱出津仕候ハバ何卒早々御相談 御上木之義偏ニ奉希候 且家集之義も不日ニ御書出来仕候間 是又弘綱ニ御談宜候 二被仰上可被下候段奉願候

昨年十二月の文雄の書翰に対する返事があり、それに対するものが本翰である。弘綱が津の藤堂高猷に召されたのは文久元年十一月であり、これには文雄の推挙があり、文雄の代理として参上した。そのことは『いせの家づと』二編の跋文に自ら「師翁の代としてたび津の君に召され」とあるにより、また打田昌美宛の元年七月二十三日書翰に「津侯も漢字のみの処 文雄先生に御入門の由」とあることからわかる。(北川英昭『佐々木弘綱の世界』所収「佐々木弘綱と竹柏園門人」参照)さてここでは、弘綱が津へ来るなら、すぐにでも上木之義(出版)を相談してほしい、また家集についてもそろそろ書き終へるのでこれも弘綱と相談して藤堂侯に申し上げてほしいと言ふのである。簡単な一文で要用のみを伝へたものだが、家集は文雄の『調鶴集』であらうから、この上木は『伊勢の家づと三編』のこととならうか。何にしろ弘綱がその役目を負つてゐて、彼を抜きではこれらの書物の刊行が成立しなかつたことが分かる。文面からはとにかく急ぎであつた様子が伺へる。

五、天誅家流行物騒敷御座候 文久三年

●三〇一九 (文久三年) 一月二十三日

昨冬ハ御役銀御拝領御家内様方へも御賜物 弘綱も白銀

川喜田政明と井上文雄(中澤)

十五枚頂戴之由 於拙老も難有仕合奉存候 御序之節は宜く被仰上可被下候 弘綱兎角難有り且天狗之由 □の精々申聞置候 何分宜御取なし可被下候 御上洛後は老拙も御地遊歴と心懸居申候

阿州侯御短冊近日御願御廻し可申候 御役柄二而も御退出後は毎夜御当座之御歌御座候而日々被召拙老も寸暇今無候是二は困り入申候 鐘翁賛拝筆呈候 当年月並兼題呈候御序之節は御詠出可被下候 一枚弘綱へも遣下申候 塙次郎も被為害申候 廣蔭も宜和に箆居致居候 当地も天誅家流行物騒敷御座候

本翰を文久三年の一月二十三日付とした。文中に塙次郎(保己一の男、忠實)が殺害された記事があることによる。塙忠實は父のあとを継いで和学講談所を運営してゐたが、この時期にいらぬ容疑をかけられ、伊藤博文ら浪士の襲撃により文久二年十二月二十二日に落命した。これはその一月後に書かれたこととなる。役銀拝領の記事があり、また弘綱が「白銀十五枚」を頂戴したとあり。彼の日記の同年十二月二日条に「此夜白銀十五枚拝領」とあるのに合致する。またこのことは十二月七日付の打田昌美宛書翰にも見える。川喜田家にも拝領物があり、それを告げた書翰の返しであらう。文雄は弘綱の榮譽を我が物のやうに「於拙老も難有仕合奉存候」と喜び、ついでに宜しく

伝へてほしいと言ふのであつた。それでも「天狗」になつてゐまいかと三十六歳の若き弘綱を心配してゐる。また文久三年の文雄（柯堂）塾の「月並兼題」の用紙を弘綱へも渡してほしいと依頼してゐる。

「御上洛後は老拙も御地遊歴と心懸居申候」とは、文雄は伊勢の地への訪問を政明から度々催促されてゐたやうで、早いところでは嘉永五年（二三一便）にもあつた。これに對し將軍家茂の上洛後に落ち着いたら出かけようと考えてゐると、心情を披露してゐる。しかしこれは叶はなかつたのであり、幕末から維新当初の文雄の周辺は伊勢詣でに行くやうな安逸としたものではなかつた。また従来から依頼のあつた阿波の蜂須賀齊裕の短冊が近日入手できるので贈ることを告げ、蜂須賀齊裕の歌の指導に毎夜召されて困惑してゐるとも述べてゐる。なほ江戸では埴忠實が殺害されるなど天誅家が流行して「物騒敷御座候」と述べてゐる。興味深いのは「廣蔭も宜和に籠居致居候」とある一条で、富樫廣蔭が沼津の高田宜和方に籠つてゐるとの情報を得てゐることである。廣蔭は幕末期に高田宜和方に滞在し、著作に耽つたことはその伝記（架蔵『言靈幽顯論教授諸図』所収）にあるが、それは慶應元年以降のことである。早くも文久三年の時点で宜和とどのような交流があつたこと、また文雄も廣蔭、宜和と知己であるかの書き方をしてゐる点などが挙げられる。

この情報を文雄はどこから得たのであらうか。

この書翰には外包みも残されてゐる。表書きは「伊勢津／川喜田久太夫様 江戸／井上元真」裏は「扇添／封／正月廿三日」とある。年賀の扇を添へて贈つてゐる。

●二二三（文久三年）四月四日

先便いせの家つと普呈仕候ニ付金百五十匹御惠贈奉多謝候
扱細川藩川北氏の義去々相尋申候得共兎角相□兼可申二付
猶又彼藩の人に相頼置申候、彦根長州等の藩にも知己上候
間去々相頼置申候 相知れ候得ば早々文通の旨約置申候
先は例の多忙中・（略 以下追書き）猶々 頃日河ごえ

辺遊歴仕候間 貴□甚延引の段御海恕可申候

文雄は天誅家の流行などで、身の周囲が騒がしい状態になつた文久三年春、江戸を離れて川越の門人安齋保美のもとに身をよせることになつた。そのことを詞書にした歌が『調鶴集』にある。ここに「河越辺遊歴仕候」とあるのはそのことであり、これを文久三年と考へた。さう考へるとこの進呈した「伊勢の家づと」は二編のこととなり、その礼に「金百五十匹」が贈られてゐる。文久二年の夏にもこの書を送り、礼を貰つてゐるので、また別便で送つたものの返しであらうか。さうであるとした時代の書物の流布には書肆を通さず、このやうに門人間での頒布もあつたことがわかる。

政明は細川藩の川北氏に関して随分の執心があつたやうで、前便で文雄は藩主の奥方に訊くとしてゐたが、それでもなほ不明であつたやうで、今度は藩士に訊く、また彦根藩や長州藩にも知人がゐるから情報を得ておく^とと伝へてゐて、田安家の典醫である身分を存分に發揮してゐるやうである。政明はこの川北氏と文通をしたかつたやうだが、それは何故であらうか。本姓川北を川喜田に改めたのは政明の七代前のことであつたといふ。

●二二六 (文久三年・または二年カ) 十一月十六日

十月廿三日之花翰恭拝見仕候(略) 御詠草二冊拝見取候

よき御うた多く深く奉感候 不相替金百五十匹御惠贈奉多

謝候 扱又御同性聞合之義無如才心懸居候所 此ほど細川

侯奥方入門被致候間 近日小生屋敷被招可申候 其節聞合

可申候左様思召可被下候

(以下追書き) 猶々ちらし京都より差こし候由御取受に

やまゐり不申候

十月二十三日付政明の書翰の返信である。政明の詠草二冊を見た、良い歌が多く感心した、金五十匹を戴いたと御礼を綴り、二二三便書翰にあつた細川藩の川北氏について、細川侯の奥方が入門したので近日にお屋敷に歌の指南に参上するので聞いてみると書いてゐる。本翰を文久二年十一月としても、この細川藩川北氏のこととは通じる。

川喜田政明と井上文雄(中澤)

六、時節柄刻料紙等高価二相成 出版の費用の依頼

●二二五 閏月二十二日

梅雨快晴御同慶(略) 先便申上候家づと今日漸上木出来

仕候二付 先便被遣候金子五両遣し申候二残金の所次便に

被遣し可申候 其節製本為□に仕候 左様思召し可被下候

即岡田屋受取書入御覽申上候御落手可被下候 先は右御頼

旁 早々頓首

『伊勢の家づと』の完成を告げ、届けてゐる。ついで刊行の費用の五両の支払と残金の依頼をし、岡田屋の受け取りも併せて送つてゐる。これは初編のことであらうか。初編は安政五年二月の序文があるので、その刊行はそれ以降でなくてはならない。本翰の年紀は閏月があつた年で、文面に梅雨の記述があることから勘案すると、安政四年と慶應元年に五月の閏月があるが、いずれも『伊勢の家づと』の上木の時期とはずれてゐて関係がないやうで不明である。

●二二八 四月二十三日

此一封弘綱二おとどけ可被下候 石薬師へ帰申候ハは何と

ぞ乍御面倒早々おとどけ可被下候(略)

二白 伊勢家づとも上木出来一二枚に相成申左様思召可被

下候

本翰でも弘綱への書状を託してゐる。『伊勢の家づと』が出来たやうだが、どの編であらうか。「一二枚に相成申」とは何を意味するか不明である。

●二三四 (慶應元年) 四月十五日

先便差立候家集之義如何也 差出被下候哉奉願候 扱又伊勢家づと三編之義追々上木二相成申候間右刻料之義 早々御廻被下候様奉願候 尤時節柄刻料紙等高価ニ相成御氣の毒ニ奉存候 刻料一丁ニ付板木共金一分一朱と申候故銀十八匁と懸合置申候 右の割合ニ而金子御廻し可被下候 摺立□□早々御廻し可被下候 偏奉希候

『伊勢の家づと』三篇の刊行にあたり、様々の懸念事項が書かれてゐる。三篇は元治元年八月の序文があるので、この四月は翌年慶應元年にあたるのではないか。板木の彫刻料や紙の値が幕末期の政情不安な時期に高騰したやうで「御氣の毒ニ奉存候」と言ひながら、「刻料一丁ニ付板木共金一分一朱」であり全てで「銀十八匁」と懸合つたことが書かれ、その割合で費用を早く送るよう求めてゐる。また摺り立てについても言及してゐる。

●二二三 (慶應元年) 四月二十日

先便申上候伊勢家づと刻料何卒差早々御廻可被下候 岡田

屋より度々申出候間此段何分奉願候

扱別紙弘綱へ御届可被下候 毎々乍御免倒 御地出□致候はバ何とも恐人候得ども早々石薬師へ御届可被下候奉願候 頓首

●二三四 (二三四便) の五日後に書かれ、前便に書いた『伊勢

の家づと』三篇の彫刻料として岡田屋から催促があつたことを追加として述べてゐる。また弘綱へも「毎々乍御免倒」と断つた上、送付してゐる。弘綱宛の書翰を川喜田経由で送るのは何故であらうか。早々とあつて直接石薬師へ送るよりは、それでもこちらを利用した方が早かつたのであらうか。

●二二七 宛闕 日闕 断簡カ

政明主より家づとに付金未達候 此節がら岡田屋にても手付金ほしがり申候 又乍御面倒政明と早々御談可被下候 宛名及び日付が不明のもので断簡かもしれない。内容からして(二三四、二二三便)に次ぐものであらう。なかなか代金が届かないので誰か別人経由で政明へ届けたのかもしれない。内容は岡田屋への支払ひのことについてである。政明と相談せよと申し伝へてゐる。

●二〇八 (慶應二年) 六月十八日

頃日は段々御配慮被下有難 家つと料金両度都合十二両落 掌即岡田屋へ払遣候 受取書先便差立申候 今頃は御落手

と存候 さきはひ草御称美被下難有 金百五十匹御惠贈奉
萬謝候

一、人馬継立のて御細書有難承知仕候

一、村上忠順がこと えみしらが舟のほのかに云々 御□

□□は三河人村上承卿と申仁に而 御地より御近隣ニ

御座候間御一封被遣候得ば直ニ相届可申候 菰野の門

人村井九兵衛へ御頼にても届候

一、先年の歌即書改差上候御落手可被下候

一、家つと此節製本ニ取掛か、り候間出来次第便ニて御

□便に差上可申候 左様思召可被下候

一、阿州のおうたは拙老所持の品にて御座候間別御配慮に

及ばず申候

一、御領主様の短冊は拙老一葉所持の外は無御座候間其内

相頼候而御内々御贈り可申候

一、家集の義此節専ら取掛かり彫立居申候は 御かかりは

何方へ相談致が宜哉 御内々御差圖被下候 御序文の

義も早早御頼申上度□□の義宜御取斗被仰聞可申候先

は御礼御報まで

『伊勢の家づと』の料金、全てで十二両を岡田屋に支払ひ、受
取を先便で送ったことを告げる。また『さきはひ草』が出来上
がり、その御礼に金百五十匹が政明から届いてゐるので、これ

川喜田政明と井上文雄（中澤）

を慶應二年とした。さうするとこの『伊勢の家づと』は三編の
ことであり、全ての支払ひが政明の援助によつてなされたこと
がわかる。三篇の序文に「さればこたびは弘綱景秀にかはりて
われかく板に物しつる也けり」と政明が書いたのもその実情を
示してゐよう。ただ製本はこれから取掛かるやうで、その刊行
は慶應元年九月であつた。これによると三篇よりも『さきはひ
草』の方が先に世に出たやうである。

政明は『さきはひ草』の巻頭三首めにある村上忠順の「えみ
しらが舟のほかに霞む也もじの横濱春やたつらむ」の歌に注
目したやうで、その人物について問うたやうである。それに對
し文雄は三河の村上承卿（忠順）であると答へ、三河は津に近
いし、菰野藩の文雄の門人村井九兵衛（長史）へ頼めばよいと
告げてゐる。村井長史の歌は『さきはひ草』に載る。村上忠順
は安政二年、刈谷藩主について江戸へ行き、この時刺を通じた
人物の一人に文雄がゐた。以来親しく指導を仰いだやうでもあ
り、安政四年十月の「百番歌合」（刈谷中央図書館村上文庫蔵）
には文雄が判をしてゐる。また幾つかの書付が村上家にあり、
これに関して忠順の「歌合」と題する一文に文雄が朱を入れた
ものがある。そこには「この説もやがて板に物し侍ればとほか
らずまゐらすべし」（蓬蘆文集）とあつて、歌論の執筆につい
て触れてゐる。これは『伊勢の家づと』のことを言ふのであら

う。この忠順の一首は文雄の言ふ諷刺倒悟のよく表れた歌なのであらう。慶應二年当時文雄と忠順との関係は深いものがあつたやうである。

ついで短冊の話題となり、蜂須賀齊裕の歌は所持してゐるが、そちらの領主藤堂高猷のものはないので内々にくださるよう政明に依頼してゐる。また文雄の家集『調鶴集』についても板木の彫刻が始まつたやうであるが、誰に相談したらよいか指図がほしいと述べ、序文についてもどうすべきか依頼をしてゐる。実際に刊行された『調鶴集』の序文は佐々木弘綱が書いてゐるが、それによると、そもそも伊賀中将の文雄の家集がほしいとの要望が弘綱の許へ寄せられたと言ふことが書かれてゐる。『調鶴集』の出版もこのやうに文雄が思つてゐないところから出てきたものであり、それが「誰に相談すべきか云々」といふ有難い質問になるのであらう。何れにせよ刊行された文雄の歌論や家集には伊勢の門人の経済的支援や関与が大きかつたことが言へるのである。

七、『さきはひ草』と『調鶴集』ほか

●二二二(さきはひ草刊行＝慶應二年以前) 七月二十日 ※摘

英集刊行ハ安政四年

六月十九日の花墨有がたく拝見仕候 先以時下残暑節被爲
摘御萬祥奉賀候 抑先便之御詠草拝見 弥感明仕候 別而
浦秋夕は出凡と奉存候 摘英集専ら取懸居候間 先々多撰
入可申候 但し少し加筆仕候も可有之候 此義は不悪御許
容可被下候 先は御請迄早々頓首 時下御自愛專一奉
存候

六月十九日差出しの書翰を見た返事を七月二十日に認めてゐる。これは政明から送られてきた詠草に対して、「感明仕候」と感想を述べ、「浦秋夕」の歌を賞賛し、現在『摘英集』を選定してゐるからそこに「多撰入可申候」と期待を寄せてゐる。返送にあたり加筆をしたが「不悪御許容可被下候」と述べてゐる。そこで刊行された『摘英集』を見ると、「多撰入可申候」とあるものの、政明の歌はなぜか一首も入つてゐない。一方『さきはひ草』(『摘英集』続編と称する)には三首あり、殊に「浦秋夕」と題する「海人の子があみはず浦の夕つく日さびしの秋は成にける哉」の歌があるので、この書翰にある『摘英集』云々はその続編と称する『さきはひ草』のことである。費用を負担したものの三首しか載らないので凡そ「多撰」とは言へないが政明はこれをどのやうな感慨で見たのであらうか。他の二首は「夏山家 折々はみやこのひとにすずしさをうらやまれけりみやまべの庵」「菊 ませのうちに八重さく菊は九日のためにた

をるも惜しまれにけり」である。

●二二〇（慶應三年）一月十三日

旧臘二十一日の花墨恭拝見仕候 調鶴集晋呈御挨拶と御座

候て 金一円御恵贈奉万謝候 右厚礼請取申上候 二白調

鶴集校合行届不申汗顔之至 則為直申間入木出来次第引替

可申候 左様思召可被下候

文雄の家集である『調鶴集』は慶應二年の十二月に刊行されたやうで、年内に政明の手許に届いた。それに対する礼状と御挨拶の金一円を十二月二十一日付で送り、その返しがこれである。追伸で『調鶴集』の校正に不手際があり、「汗顔之至」とある。すぐ直させ入木で訂正してまた送ると書いてある。具体的にどこに間違へがあつたのか気になるが私には初版と後刷りがわからないため見出されないである。

●二二八（年不明）二月十五日

先月二七日の花墨恭拝読仕候（略） 別紙御詠草併ニ、御

舍弟様御詠草拝見差上候 渡部氏への御状早々御届け申候

春来別而多忙

文雄は政明の弟の詠草も見てゐたことがわかり、川喜田家を挙げて師事してゐたやうである。また渡部氏への書翰を依頼されてゐるが、次便の渡辺氏と同じならこれは続きのものとなるか。江戸の文雄周辺の渡部（渡辺）氏は誰であらうか。こちら

からも手紙を依頼するだけでなく、かやうに向ふからも依頼されることがあつたやうである。

●二〇九（嘉永六年か）三月二十日

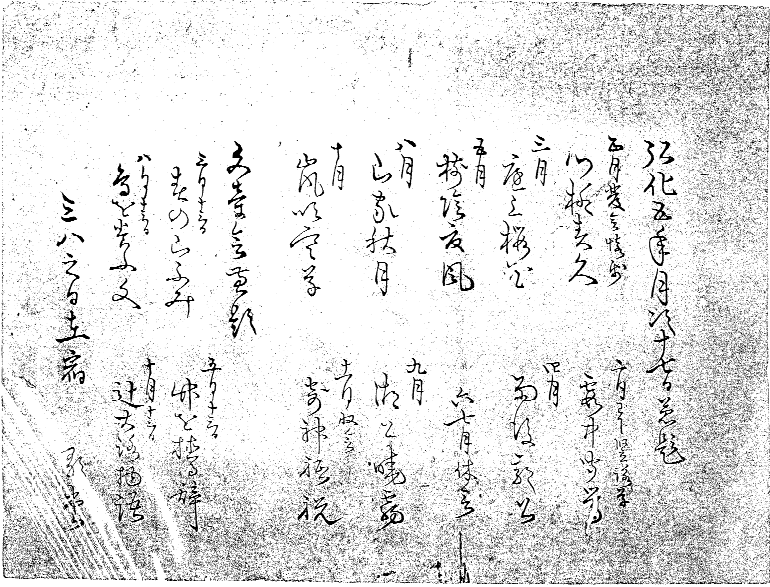
本月九日の御消息恭拝読仕候（省略） 御著述帰西日録

併ニ金百匹御恵贈千万奉謝候 渡辺氏への御文通早々相届

申 任仰当年兼題摺呈候 御出詠可被成下候

「御著述帰西日録」とあるので、これは政明の著作と考へられる。帰西とあるので東から西、多分江戸から伊勢へ帰つた時の記録ではないかと推量するが、これは（原本が川喜田家資料に）現存してゐるか不明の由である。金百匹とともに贈られてゐるので借りたものでもなく、このまま文雄の手許にあつたのであらうか。二二二便によると嘉永五年の五月に政明は江戸に滞在してゐたやうなので、その帰途の折の紀行であらうか、わからないままである。また（嘉永六年の）文雄（柯堂）塾の「月並兼題」の用紙を送り届けてゐる。同様のことは文久三年（二〇三九便）にもある。

〔図版一〕



弘化五年 歌堂（井上文雄）月次歌会兼題ちらし（鈴木亮氏所蔵）
 書翰に見える「月次兼題」はこのやうなものであつた。弘化五年は改元あつて嘉永元年となる。毎月十七日が歌会の日で他に文章会があり、三、八のつく日に在宅してゐたこともわかる。（図版二）によると、文久当時は十八日であつたことがわかる。間宮永好の『大喚鶏喚之舎日次記』（盛岡中央公民館蔵）によると文久期に永好は十八日に開かれてゐる文雄の歌会に赴いてゐる。

〔図版二〕『癸亥発会附』（文久三年）

正月十九日 茅野雪菴	全 井上文雄	全 田川一菘	全 目田菘菴	正月十七日 牛窪風香	全 齊藤一蒲	正月十七日 小橋摘陰
---------------	-----------	-----------	-----------	---------------	-----------	---------------

青裳堂刊『書画展観目録集成』所収

八、旧年の挨拶 その他

●二二七 (年不明) 二月七日

旧年の御挨拶と御座候而金五十匹御恵投千万奉謝候 旧臘は未曾有の大変併御地格別の御障も不相爲在候段奉賀候 春來何かと多忙貴報延引御仁免可申候 例の近詠二葉備貴覽申候 御一笑可被下候(略) 時下御自愛專一奉存候 御礼申落し候 先達而は荒尾菜沢山御恵投難有候 好物にて日々相楽申候

旧年の挨拶の礼状であり、十二月の「未曾有の大変」は何を言ふのであらうか。何れにせよ何事も支障はなかつたやうである。荒尾菜を沢山戴いた謝辞が追伸にあり、好物であると告げてゐる。

●四三九三 (年不明) 九月二日

八月十四日の御消息一昨日手二入恭拝読(略) 御詠草一卷拝見先々感明仕候 愚存少々傍書仕差上候御一笑可被下候 当地も良夜は雨漸深更に快晴相成候
おほかたの人をしづめて晴ぬるか雨さへ月に心有けり 御作と相合申候阿々 頃日之蜂腰両三首別紙二入御覧申候
八月十四日差出しの書翰を見た返事を九月二日に認めてゐる

川喜田政明と井上文雄(中澤)

る。これは政明から送られてきた詠草に「愚存」を少々書き加へて返送する送り状である。「感明仕候」と感想を述べたあと、秋雨が降る季節であつたやうで雨の状況を書き、自詠一首を添へてゐる。「蜂腰両三首」を別紙で送るとしてゐるが、何のこゝとであらうか。蜂は短冊の話題となつてゐる阿波の蜂須賀の略号であらうか。年代は不詳である。

●二二〇 (年不明) 五月二十七日

御詠草拝見爲御挨拶金百匹御恵贈奉萬謝候 猶後音万報可申上候 先は御礼迄

政明の詠草はたびたび文雄の許に届けられたやうで、その都度いくらかの謝礼が払はれてゐる。これが井上家の家計を豊にしてゐたことと思はれる。

●二二一 (年不明) 三月二十一日 政豊宛

御詠草一冊拝見驚嘆仕候 御出精奉折候 乍末尊大人へ宜伝声可被下候

これは息政豊の詠草を見た記事で、政豊宛である。「驚嘆」「御出精」と相手を誉め、父政明への伝言を述べてゐる。

●二二二 (年不明) 五月七日

御詠草合點差——之長短に甲乙御座候
詠草に合点を加へたことを述べてゐる。

●二二二 (年不明) 一月二十八日

本月六日の尊書忝 拝読仕候 小生無異加馬齡申候 御放
念可被下候 例之多忙略書寛恕被下候

●二二六 (年不明) 一月二十二日

本月六日の花墨忝 拝読仕候 不相替書初短冊二葉差上候
ともに正月の挨拶状の返事である。政明は毎年六日付で新年
の賀状を送ってゐたのであらうか、返事はどれも事務的である
が、書初めの短冊を二枚送るなどの文雄の心意気も知られる。

●二二〇 (年不明) 七月八日

六月二十七日の懇書恭拝見仕候 (略) 委曲御教示の段難
有奉存候 早々両家へ願出可申候 猶取□御鶴声可被下候
これも事務的な内容だが、当事者でないと思われるもの
がある。何かを詳しく教へていただいた礼と、両家へ願ひ出てみ
るとのことである。両家はどこかの見当もつかない。

九、をはりに

以上、川喜田政明宛の井上文雄の書翰を紹介するとともに、
文雄と政明を中心とする弘綱などの関係を探つてみた。断片的
な記事が多く、いまひとつ明らかにならないのが書翰資料を扱
ふ上でのどこかしさではあるが、なんとなく周縁が見えてくる

のではなからうか。

文雄は門人の詠草を添削するとともに、その謝礼を得、また
著作の刊行に政明を始めとする周辺の人物の援助協力があつた
ことがわかるのである。御三卿の田安家の典醫でありながら、
その身分で大名家へ歌の指導にも出て、また江戸派の殿將と後
に称された文雄ではあつたが、かやうに地方の豪商を門人にす
ることで、著作を世に出すことが出来たのである。この一例を
考へるとこの時期の書物の刊行にはその著者のみならず、それ
を支へた門人の経済的な助力があつたことを考へねばならない
であらう。

なほ本稿をなすに当たつて、研究成果報告書をお送りくださ
つた青山英正氏、菱岡憲司氏に厚く御礼申し上げます。また資
料のご提供を戴いた石水博物館、殊に龍泉寺田佳学芸員に謝意
を表します。なほ資料翻刻の常ではありますが、判読できない
文字があることや誤読を恥ぢ、ただ恐れるばかりです。

〈参考〉

伊勢の家づと 初編 佐々木弘綱蔵梓

(序文 甲)

いせの國びと佐々木弘綱去年の秋より我もとに物学しつるに此頃國に帰りなんとて いかで初学のひとのために彼玉あられやうの書また世のひとたちのかたくに僻心得したる事どもかきあつてたまはりなんとこふにまかせて かくは物しつとみの業なれば證哥なども唯おもひ出るまゝなれば

僻事と人やみるらむおほかたのならひにたがふいせの家づと

文雄

(序文 乙)

伊勢の家づとのはし書 鳥が啼東の都にして我大御國の学びに名だたる人あまたあれど あるはさくすゞのふることにのみなづみ あるはあしかきのちかき代のおきてをまもりつゝ、花かたみかたみにかたよれるなかに 井上の翁はかしのみのひとりぬけいで ゆく水のいとやくより三粟のなか昔をなむよろしとは思ひさだめられたる しかあるからに延喜天曆より長保寛弘のころまでにかゝれる哥文のかぎりをうまくさとりて 哥よむにも文つくるにもおのがものとせられたり 爰に我まなびの友なる神風の伊勢の國人佐々木弘綱去年の秋より翁のもとにきかよひて 学の道どもなにくれといそしみつゝ、いまふたとせ

川喜田政明と井上文雄(中澤)

三とせハとゞまりてんの心かまへなりしを 空ゆくかりにやもよほされけむ ひとたび國にかへりなんとするに翁例のいとまおはせぬ中より とみにものしてあたへられしは このひとまきの家つとなりけり さるはかのかたよらぬさとしごとにておのがどちのいぎたなきまなびの窓のたまあられ ふたたびおどろかされてひとことをそへつるは 安政の五とせといふとしのきさらぎのはじめのときをか 江戸の旅のやどりに

石橋の近江國 あらたへの藤尾の景秀

(跋文)

玉霰さよ時雨の学の窓うつおとにかつがつ冬のよの眠はさめつるを いかにせむいぎたなき春の朝いする人なきにしもあらずこゝに我友弘綱ぬし文の林にふかくいらたちて こぞの秋よりわが江戸の旅やどりに相すみして井上翁がかよひてものどふこと一日もおこたらず このころ國にかへるとてかゝるつと得たりと此書をとう出みせられぬ こは初学の必心うべきことなれば君ひとりひめもたるべき事かハとてや、咲いつる桜木に、ほはせつるは 安政五とせきさらぎなかば 竹川政恕

伊勢の家づと 二編

(序文)

柳園弘綱さきに井上翁のみもとにものまなびしつるころ ゆく

りなきことありてひとたび故郷に帰らむことを聞えつるに 歌
よみふみかくに心うべきことどもを かつがつかき出たまひて
これ家づとにて得させたまひしをおなじをしへことどもの遠こ
ちより それみまほしとてこひおこせけるを ことごとけうつ
しやらむもいとまいるわざなればとて 竹川政恕おのれにはか
りていせの家づと、題号して はやう板にゑらせつるを それ
にもらされしをちをちつぎて書出たまひきとて こゝにおこせ
たまへり 其論いと耳あたらしくさきさきのうしたちのいまだ
いひ出られぬことゝも多く 板屋のあられまともやうち驚かさ
れて おのれにひとしきいぎたなき友たちにも はやうみせま
ほしくて 板にもものすべく思へれど 翁にもとひはからはでは
などひとたびはたゆたひしを とりどり國をへだてしさかひは
雁のたよりもことごとしければなべては事なしをへて後にこそ
物せめと おのれが心ひとつに いせの家づと二編としてかう
板にはゑらせつる也 ときは文久二とせといふとしのむつき

近江國信樂人 藤尾景秀しるす 由清書

(跋文)

師翁の代としてこたび津の殿にめされて しはつはつかの夜旅
館の寒燈をか、げて 寝られぬまゝ、に何くれの書ども見ぬたる
に やをらさうしひきあけて入くるは はしため成けり ちか
うより来てこはいまあふみよりまゐりたりとて藤尾ぬしのふん

じ物を得させつ やがてひらげばうつし巻ひと、ぢあり 消そ
こにさいつとしその得られつる家づとの次の巻をこたびはお
のれにおくられぬれば ひとりひめおかんもあたらしくとみに
板にものせまほしければ これがおくにひとことそへよとある
に いたうれ敷よみもて行ければ我心さびしさもうちわすれて
故郷今夜千里もおもはずいみじうめでたき説ごと、かへさひ見
るほどに 長夜もや、しらみぬれば即すゞりの氷をくだきて廿
日あまりひと日といふ日の朝まだきにかくなむ

佐々木弘綱識 応需定る子書 文久二年

伊勢の家づと 三編

(序文)

玉あられさよしぐれのふたつのふみ学の窓におとなひて世の人
の眠りをおどろかさむとしつれど ようせずば中々に眠りをま
すべく 夜深きときこと、ものおほかりけるを 師翁伊勢の家
づとをあらはされて いすゞ河のそこひ深きことゝをももあさ
あさとひち、かにときをしへられしかば 此家づとを得む人ら
はいまだなきも 目をつゞらかに夜の明たらむ心地なんせられ
ぬべき さればこたびは弘綱景秀にかはりてわれかく板に物し
つる也けり 元治元年しはす

伊勢人 川喜田政明 江門やすらけい子書

(跋文)

伊勢家つと三篇跋 藤原廣道ぬしは去年のふゆ身まかられ 中
寫廣足翁は此春世になき人となられきなどおもひ出られて い
と物あはれなる秋の夕ぐれ はしちかう見出たるをりしも 川
喜田政明ぬしの初雁の玉づさしていひおこせられしは いせの
家づとの三編を井上翁のこたびはおのれに得させ給へれば 例
の一事をとてその草稿をおくられたり 見もて行にかの二大
人もいまだいひおかれざる説どもいとめでたさに 悲しかり
し心もけて やがてかくかきそへてかへしつ

元治元年八月 佐々木弘綱 やすらげいこ書

調鶴集

(序文)

調鶴集のはしがき 歌にたくみなるありつたなきあり、たくみな
るはいよいよ道にすすみて 天地をうごかし 人をも感動せし
むるきはいたらむとし つたなきは歳ふるままにますます拙
く ことやうなる言葉てにをはなどもて 初心をおどろかすの
みにて はふ虫もうごかす事かたし されどまけじたましひに
語詠語格などの説をたてて 人にほこるめり 爰に我師は彼た
くみなるきはにて うたは天地のなしのままなる人々の氣象よ
りいでて 賢し愚かなりとするべき吾国有用の大道なる事を見

川喜田政明と井上文雄(中澤)

ひらきて あまた年よみ出られたる言の葉のここかしこに散ば
ひたるを いとあたらしきことにおもほしたまひて こたび伊
賀中將の君翁の家の集あらばたてまつれ 桜木にははせて世
にあまねくしてむとおのれに仰言有けるを かしこみていひや
りけるに 師のいみじうよろこばれて墨田川のすにただよふ底
の藻屑も いせの海きよき渚にかりあげられなば いかにかひ
あるさちならむとこの集はかきつめられし也けり あはれもく
づにはあらでうるはしの玉の光や かくいふは慶應のふた年二
月のはじめつかた 伊勢人佐々木弘綱

(なかざは のぶひろ・東京都立科学技術高等学校主幹教諭・
國學院大学兼任講師・博士(神道学))